

同志社大学司書課程・司書教諭課程主催

2010年度東京地区図書館見学会および見学記

(日程)

8月25日(水曜日)

12:50 JR山手線巣鴨駅の改札に集合

13:00-14:30 福音館書店見学

15:30-17:00 渋沢栄一記念財団実業史研究情報センター見学

「水月ホテル鷗外荘」に宿泊

8月26日(木曜日)

10:00 ホテルロビー集合

10:15-11:15 国立国会図書館国際子ども図書館見学

14:00-15:30 国立国会図書館本館見学

見学後解散

東京地区図書館見学記

政策学部政策学科 八木寛樹

うだるような暑さの続いていた8月の末、私は東京の各種図書館を回る図書館見学会に参加した。今回の見学会では、2日間に渡り出版社・専門図書館・国立図書館と3種4箇所を足早に回ったのだが、私はそこで数多くのことを学ばせていただき、図書館そして本の未来について考えさせられた。

最初に訪れたのは福音館書店である。ここでは同志社の大いなる先輩というご縁から、松居直さんにお話を伺った。作家、編集者、経営者として長年児童文学に携わった氏の経験に基づく、「読書は体験」であるという言葉には言い表せない重みを感じ、また「ベストセラーより百年読まれる本」という編集者としての信念には、本に懸ける熱い情熱、そして社会へのまなざしを感じることができた。

次に訪れたのは渋沢史料館。ここは飛鳥山公園における“3つのミュージアム”の内の一つであり、明治のソーシャルアントレプレナーともいえる渋沢栄一の史料を博物館として展示、データベース化し、それを研究する専門図書館としての機能も備えた施設だ。ここでの研究成果は、「知的ネットワーク」として構築され、インターネット等を通じて外部に広く公開されている。渋沢の精神そのままに、知をいかに社会へ還元するかというミッションが、ネットという新しいフィールドにて試みられているといえる。私はここでも知の最前線で活躍する人々のパッション、というべきものを感じることが出来た。

日が明けて2日目。次は国立国会図書館の支部、国際子ども図書館である。上野という国内でも有数の文化の集積する場所に存在する国際子ども図書館は、旧帝国図書館の建物に動的保存修景を施した、文化的建造物でもある。そしてその名の通り、児童書・児童サービスに特化した図書館であるのだ。新しいものと古いものを融合させた建物もさることながら、外側だけでなく中、コンテンツを見ても、絵本展などの展示やデジタルアーカイブの構築など、新旧を織り交ぜたサービスを提供していることがとても印象的であった。

そしていよいよ最後の訪問先、それは国立国会図書館である。言うまでもなく、我が国唯一の国立図書館であり、日本中の知の集積地・最終到達地と言っても差し支えない場所であろう。その一端として地下7階という広大な書庫の雑誌棚を見せて頂いた。創刊号からずらりと並ぶ漫画雑誌や、フリーペーパーに至るまであらゆる雑誌・フライヤー等が所狭しと、なにより慎重に保存されている光景。そしてそれらがほぼ全て閲覧できるという事実には少々めまいを覚えるほどであった。しかしこれこそが国立図書館が担うべき役割であり、保存のみならず国民に広く、利便性をもって提供することこそが重要なのである。そのための方法として、やはりここにおいても電子図書館などの事業が着々と進められているとのことであった。

こうして4つの本にまつわる場所を見てきて、そこに共通するものとして私が改めて発見したのは、本に関わる人たちの情熱そのものである。そしてその情熱が利己よりも利他、他人へ社会へと向けられているという事実である。その上で私が見つけたもう一つのキーワードとしては、やはり「電子化」ではないだろうかと思う。電子書籍の台頭、電子図書館の必要性など、本、のみならず知に関わるフィールド全体において変革期にさしかかっていることを肌で感じ取ることができたのは、私にとって大きな収穫であったといえよう。

大きな変化・イノベーションの波がこれから出版業界や図書館の在り方を大きく変えていくのはもはや避けられないだろう。しかし、社会へと向けられたその情熱を失わない、そういった人々がいる限り、たとえどんな困難でも乗り越えられるのではないか。コンテンツやソフトの重要性が否応なく増す時代にこそ、ヒューマンキャピタルそして人と人との繋がり大切さも浮き彫りになるのではないか。それがこの図書館見学を通じて、私がたどり着いた一つの結論である。

文学研究科美学芸術学専攻博士課程前期課程 藤井 あゆみ

私は、図書館や出版業界について詳しく知り、貴重な書庫を見学させてもらうことのできる東京地区図書館見学会にとっても興味があって、参加させていただいた。私が東京地区図書館に参加するのは、これが三度目だ。このたびの東京地区図書館見学会では、福音館書店、渋沢栄一記念財団実業史研究情報センター、国立国会図書館国際子ども図書館、国立国会図書館を見学した。

見学会に参加した印象を振り返ってみると、本や図書館のことを知りたいという、私の知的好奇心が満たされ、予想通りとても楽しかった。福音館書店や国立国会図書館、国際子ども図書館は、これまでに参加した見学会で訪れたことがあった。しかしながら、児童書の出版業界の第一線で活躍されている福音館書店の松居直さんのお話や、日本の図書館の図書館ともいべき国立国会図書館の職員の方のお話は何度聞いても、本のこと、本を読む人のことを知りたくしていきたいという、熱い気持ちが伝わってきた。福音館書店の松居直さんは、同志社大学の卒業生で、お話の中にも、キリスト教のヨハネ黙示録に感銘を受けたというエピソードがあった。松居さんは、福音館書店の相談役という、とても高い役職に就かれているにもかかわらず、とてもにこにこ笑顔で話してくださるので、こちらも緊張せずにお話を聞くことができた。松居さんの最初の読書体験は、お母様に「絵本を読んでもらったこと」であり、また「母から日本語を教わった」とおっしゃっていたのが印象的だった。

渋沢栄一記念財団実業史研究情報センターでは、職員の茂原暢さんが「ブログは情報の即時性があり、活用できる」とおっしゃっていたのが印象的だった。同館は、Library of the Yearの優秀賞を2009年に受賞しているのだが、webで情報を発信することにとっても力を入れていた。例えば、渋沢栄一の孫にあたる渋沢敬三が望んでいた「絵引き」という絵の検索エンジンが挙げられる。実業史研究情報センターとして渋沢栄一に関する資料の研究・収集・公開だけでなく、来館しない利用者のためにも、充実したサービスを提供しようとされている職員

の方の意気込みが感じられた。個人的には、渋沢栄一が、大河ドラマで話題になっている幕末から明治の時期にかけて活躍した人物であったのと、同志社大学の設立を援助した人物であったというのもあって、この実業史研究情報センターに親しみを感じることができた。

webでの情報発信といえば、最近では、地図や路線情報やニュースをはじめ、書籍までもが携帯電話やiPadといった電子端末で閲覧できるようになってきている。国立国会図書館も資料の電子化に乗り出そうとしている。電子書籍については、未だ議論が尽きないが、改めて今回の見学会では、古い貴重な資料を所蔵している組織ほど、最新式の情報提供方法を取り入れようとしているということが分かり、とても興味深かった。文字通り、古くて貴重な資料は、幅広く読まれるべき資料でもあるので、電子化を進めて、資料そのものが手元になくても、データベース化したものを読めるようにしていくのが大切だと感じた。

一方では、絵本のように、子どもが実際に手を取って読むものは、紙媒体であるべきだと感じた。福音館書店の絵本の編集担当の方が、作家さんと何度も打ち合わせをして、レイアウトを決めて、色の調整をしていって、一冊の本が出来上がる過程を話してくださった。改めて絵本一冊の一枚の絵や文字には、作家と編集者の熱い議論のやり取りの跡があるということを実感した。本は内容や挿絵だけでなく、手に取ったときの質感まで全部その本に携わった人たちの労力や議論の成果なのだということがわかった。

このたびの見学会で、図書館や出版社、専門図書館を訪れたことで、情報があふれる現在において、情報は自分で取捨選択して編集していくものだということを強く意識した。私もこれから修士論文を書くために、さまざまな情報を集めて、自分で編集していかなければならないが、今回の見学会で見てきた、一つ一つの書籍に込められたさまざまな人々の労力を忘れずに、情報の貴重さをかみしめながら執筆していきたいと考えている。